



13番地魔女の家
京都アグニ

星座の物語

13番地魔女の家京都アグニを応援してください



<http://kyotoagnih.com/>



【推奨環境】

この E-book 上に書かれている URL はクリックできます。できない場合は最新の AdobeReader をダウンロードしてください。(無料)

<http://www.adobe.co.jp/products/acrobat/readstep2.html>

【著作権について】

この E-book は著作権法で保護されている著作物です。

下記の点にご注意戴きご利用下さい。

この E-book の著作権は作成者に属します。

著作権者の許可なく、この E-book の全部又は一部をいかなる手段においても複製、転載、流用、転売等することを禁じます。

この E-book の開封をもって下記の事項に同意したものとみなします。

この E-book は秘匿性が高いものであるため、著作権者の許可なく、この商材の全部又は一部をいかなる手段においても複製、転載、流用、転売等することを禁じます。

著作権等違反の行為を行った時、その他不法行為に該当する行為を行った時は、関係法規に基づき損害賠償請求を行う等、民事・刑事を問わず法的手段による解決を行う場合があります。

この E-book に書かれた情報は、作成時点での著者の見解等です。著者は事前許可を得ずに誤りの訂正、情報の最新化、見解の変更等を行う権利を有します。

この E-book の作成には万全を期しておりますが、万一誤り、不正確な情報等がありましても、著者・パートナー等の業務提携者は、一切の責任を負わないことをご了承願います。

この E-book を利用することにより生じたいかなる結果につきましても、著者・パートナー等の業務提携者は、一切の責任を負わないことをご了承願います。

13 番地魔女の家京都アグニを応援してください



<http://kyotoagnih.com/>



もくじ

星座の物語.....	4
牡羊座おひつじ.....	4
牡牛座おうし.....	6
双子座ふたご.....	8
蟹座かに.....	10
獅子座しし.....	12
乙女座おとめ.....	14
天秤座てんびん.....	17
蠍座さそり.....	19
射手座いて.....	21
山羊座やぎ.....	23
水瓶座みずかめ.....	25
魚座うお.....	27

13 番地魔女の家京都アグニを応援してください



<http://kyotoagnih.com/>

星座の物語

伝統的な西洋占星術には 12 の星座が登場しますが、これらの星座の起源についてはそれぞれ神話が残されています。

天体に関する神話の起源はメソポタミアにあるとされますが、それがギリシャ・ローマに伝わり、彼らの手によって形を変え、現在に語り継がれるものになりました。

本来ギリシャ神話は複雑で、またときとして同じ事柄についても様々な物語があるため、ここでは代表的なものを挙げています。

神話の中の神々は自分の欲望に正直で、人間味のあるエピソードに溢れています。

牡羊座★おひつじざ



牡羊座の物語は、ママ母による先妻の子への憎悪から始まります。

アテネの北にある地方を治めていたアタマス王には、ネフェレという妻がいました。ところが王は、すでにプリクソスという王子とヘレという王女をもうけていたにもかかわらず、他国の王女イーノに恋をしてしまいます。そしてとうとうネフェレと別れてイーノを妻に迎えてしまいました。

イーノは初めのうちこそ、プリクソスとヘレを「自分で産んだ子供と同じようにかわいがります」と言っていましたが、自分の子が生まれると先妻の子がだんだん邪魔に思えるようになり、しまいには殺したいほど憎むようになりました。そして何と本当にプリクソスとヘレを殺そうと、陰謀を企てたのです。

13 番地魔女の家京都アグニを応援してください



それは国じゅうの麦の種を種まきの日の前に火であぶり、それを農民に配給するというものでした。なんだかわけのわからない陰謀ですが、イーノはよほど悪知恵にたけていたのでしょう、アタマス王はこの悪だくみにまんまとはまってしまうのです。

当然、種子をあぶられた麦は発芽の季節が来ても芽を出しません。国じゅうは大混乱です。王は神官に神からのお告げを聞くように命じました。やがて、おもむろに神官は答えます。

「神の怒りを鎮めなければなりません。それにはプリクソスとヘレを生け贄（にえ）として捧げることです。」

実は、この神官はイーノに買収されていたのです。イーノはここまでの成りゆきを読んでいたわけです。

そんなこととは知らぬ王は悩みますが、イーノによってこの神託を知らされていた国民の圧力に負けて、王もやむを得ず我が子を生け贄にすることを了承します。

しかし、当然のことですが、子供たちの実の母親であるネフェレは、同情の言葉をかけるのはばかられるほど悲しみにくれてしまいました。彼女がどう腕力をふるっても、子供たちを取り返せるわけはありません。彼女は神に祈るほかはありませんでした。

そして、とうとう生け贄の儀式の日が来ました。祭壇の上には二人の子供が横たえられています。神官がおもむろに剣をとります。

するとそのとき、どこからともなくキラキラ輝く大きな動物が飛んできました。しかも、驚く群衆の目の前で生け贄の二人を背中に乗せるではありませんか。びっくりした神官たちは動くこともできません。口をあぐりと開けて見守る群衆をよそに、二人はその動物にまたがったまま、彼方へと飛び去ってしまいました。

その動物は、何と黄金の羊でした。ネフェレの必死の祈りが神に通じたのでしょうか、空飛ぶ黄金の羊が二人を救い出し、遥か彼方へと運び去っていったのです。

九死に一生を得たプリクソスとヘレを乗せた黄金の羊は、ギリシャから黒海に向けてものすごいスピードで飛び続けました。ただ、あまりに速かったためにヘレは途中でめまいを起こし、かわいそうなことに海に落ちてしまいました。

しかしプリクソスだけはその悲しみを振り切りながら、かろうじて黒海を横切り、コルキスという国にたどり

13 番地魔女の家京都アグニを応援してください



<http://kyotoagnih.com/>



つきます。

その後、黄金の羊はコルキスで神のお告げどおり神々の王ゼウスに捧げられ、その毛皮はプリクソスを手厚く迎えてくれたコルキスの王に贈られたということです。そして羊はこの功績をたたえられ、星座として永遠に名をとどめることになったのです。

また、プリクソスはコルキスの王女と結ばれ、望郷の念にとらわれながらも幸せに暮らしたということです。

牡牛座★おうしざ



ギリシャ神話でもたびたび登場するゼウスは、神々の王として君臨していましたが、たいへん恋多き神だったようです。牡牛座の物語もそんなゼウスの恋の逸話です。地中海東部に面した国、フェニキアの王アゲノールには三男一女がありました。

その一女、愛娘エウロペは大変美しかったといえます。神々の王ゼウスも雲間から一目見るなり、すっかり彼女のとりこになってしまいました。

時は春。数々の花が咲き乱れる丘で、エウロペはお供を従えながら花を摘んでいます。

すると、彼女の目の前に突然真っ白な牛が一頭現れました。これがエウロペに会いたくて天上から降りてきたゼウスの化身だったのですが、もちろん彼女は知るよしもありません。

13番地魔女の家京都アグニを応援してください



<http://kyotoagnih.com/>



びっくりして、彼女も初めは恐る恐る見ているだけでした。しかし何しろ純白の牛です。その美しさにひかれてつい見入ってしまいます。すると案外おとなしく、その表情もどことなく優しげなのがわかってきました。

エウロペは手を伸ばし、牛の頭に触れてみました。しかし、相変わらず牛は微笑みさえたたえた眼差しで彼女を見つめています。エウロペはほっとして、次には背中そして次には横腹というように、あちこちを撫で始めました。それでも牛はおとなしくしています。

「とても安全な牛なのだよ。それに人なつっこそうだし」

彼女はつぶやくと、お供の者と一緒になって、花輪で首飾りを作って飾ってあげたり冠を載せてあげたりしながら、すっかり牛を気に入ってしまったのでした。

牛に変身したゼウスも、もちろんうれしいやらくすぐったいやらでニコニコ顔だったのです。

ついにエウロペは、牛の背に乗ると言い出しました。そして、お供の者たちが止めるのも聞かずに、颯爽（さっそう）とその真っ白な背にまたがりました。

そのときです。牛が突然走りだしたのです。ゼウスはこのときを待ち受けていたのです。

いくら牛とはいってもゼウスの化身ですから、その速いことといったら、だれも追いつくことができません。エウロペも必死で牛の角につかまりながら振り落とされまいとしています。

エウロペを乗せた牛は、野山を走り抜け、やがて海辺に出ました。「やっと止まってくれるのか」と彼女は思いましたが、何と牛はそのまま海の上を走りつづけます。

そして、とうとう海を渡り、ギリシャ沖合いのクレタ島にたどり着きました。エウロペはもう、この牛がただの牛ではないことがよくわかっていました。

「あなたはいったい何者ですか」

彼女は問います。

ゼウスはここへ来てようやく正体を現しました。

13 番地 魔女の家 京都アグニ を応援してください



<http://kyotoagnih.com/>



「いや、済まなかった。私は大神のゼウスだ。怖がらないでほしい。おまえを一目見たときから愛してしまったのだ。どうかこの島と一緒に暮らしてくれないか。」

ゼウスはプロポーズすると、「そのかわり、あの土地におまえの名前を付けてあげよう」と彼方に見える大陸を指してつけ加えました。これがヨーロッパ(Europe)という言葉の起こりだと言われています。そして記念に、自分変身した牡牛を星座に加えることにしたのです。

ゼウスのプロポーズを受け入れたエウロペは、その後、クレタ島でゼウスとの間に三人の子をもうけたということです。

双子座★ふたござ



恋多き神ゼウスにはたくさんの妻がいましたが、スパルタの王妃レダもそのひとりです。ゼウスはレダのもとへ白鳥に身を変えて通いながら、カストルとポルックという双子の男の子をもうけました。双子座の物語は、この双子の兄弟愛にまつわるエピソードです。

カストルもポルックも、ともに勇敢でスポーツも得意だったようです。特にカストルは馬の扱いに秀でていました。また、ポルックはボクシングのチャンピオンでした。二人はたいへん仲が良く、いつでも一緒に行動し、互いに協力しあって色々なことをやり遂げていました。ところでこの双子の従兄弟（いとこ）にも双子がいました。名をイダスとリュンケウスといい、弟のほうは、地面の中を見通すことができるという、今で言うところの超能力があったとされています。

13 番地魔女の家京都アグニを応援してください



<http://kyotoagnih.com/>



あるとき、この二組の双子がひょんなことから争いをはじめてしまいました。争いは武器を使った殺しあいにも発展し、カストルはついに槍（やり）に胸を貫かれて死んでしまいます。怒ったポルックもリュンケウスを槍で突き殺しますが、それを見たイダスは怖じ気づいて逃げ出してしまいました。

しかし、最愛の兄カストルはもうポルックのもとへ帰ってはきません。悲嘆にくれたポルックは、「兄さんのいないこの世には生きていたくない」と、自らの命を絶とうとします。

ところが自分で矢を胸に何本も突き刺すのに、どういうわけか痛いだけで死ぬことができません。そこで高い崖から飛び降りて死のうとしますが、途中に生えている木の枝にひっかかり助かってしまいます。

はた目には滑稽に見え、運の良い人に思えるかもしれませんが、本人は真剣です。

実は、ポルックは大神ゼウスの血を強く引いているため不死身だったのです。カストルも同じくゼウスの子ですが、双子とはいえ、わずかにレダの血を強く引いていたため、不死身ではなかったのです。

そこでとうとう、ポルックは父でもある神々の王ゼウスに、「兄が死んでしまっては、私には生きていこうという気持ちがもう湧き起こりません。どうか兄の後を追わせてください」と頼み込むことになります。

我が子の痛ましい決心を聞いたゼウスは、しかたなく二人を星座に変え、空に上げたということです。

双子座にはカストルに相当する青白い星と、ポルックを表す黄色に輝く星が見られます。カストルのほうが暗く見えるのは、彼のほうが先に死んでしまったからだとされています。

また、彼らが航海中に大嵐に遭った時のことです。同乗していた楽人オルフェウスが神々の怒りを鎮めるため得意の竖琴を奏でると、みるみる嵐は収まってしまいました。そのときカストルとポルックの頭上に二つの星が輝いて見えたということです。

この逸話により、船乗りの間では、二人は海の守り神とされました。嵐のとき、空電現象によりマストの先に光が見えることがありますが、これは二人が船を守ってくれる証であると中世の船乗りたちから信じられたセント・エルモの火と言われるものです。

13 番地 魔女の家 京都アグニ を応援してください



<http://kyotoagnih.com/>

蟹座★かにざ



ヘラクレスといえば、ギリシャ神話に登場する名高い豪傑ですが、実は自分の妻と子供をあやめるという大罪を犯しています。

彼はゼウスの子ですが、正妻の子ではなかったためゼウスの正妻ヘーラに憎まれることになります。そしてついにヘーラに呪いをかけられ、錯乱状態になって殺人を犯してしまうのです。

今ならば責任能力がない状態での犯罪ということで無罪になるところかもしれませんが、それでも殺人を起こしたことにはかわりなく、しかも最愛の妻と子供を手に掛けてしまったので、正気に戻ってからの罪の意識は相当なものでした。

彼はどのように罪を償ったらよいものか、ゼウスに伺いをたてます。ゼウスはティリュンスの王、エウリステウスに仕えることを命じました。そして、エウリステウスはヘラクレスに罪を償わせるため 12 の苦難を与えたのです。そのひとつが、この蟹座の物語につながる逸話です。

ある沼にヒドラという怪物がいました。頭が九つもあり、毒ガスを吐くという巨大なへびの姿をした怪物です。沼のまわりにはヒドラの毒を吸った動物たちの死骸（しがい）の山ができていたということです。

このヒドラを退治しろというのが、エウリステウスからヘラクレスが受けた命令でした。

ヘラクレスは勇躍ヒドラ退治に出かけます。

沼ではヒドラが洞窟で眠っている最中でした。ヘラクレスはたいまつをかざし、眠っているヒドラをおびき出します。そして何事かと頭を出したところを、「エイッ！」と切りつけました。見事にヒドラの首は宙に弧を描い

13 番地魔女の家京都アグニを応援してください



て吹っ飛びました。

ところが驚いたことに、次の瞬間には切り落としたばかりのところに首が生えています。びっくりしてそれを即座に切り落としましたが、また同じように生えてきます。そこで別の首を切り落としましたが、そこからまた新たに首が生えてくるのです。これではいくら切ってもきりがありません。

ヒドラは切り落とされた首をすぐに再生させてしまうという、恐るべき怪物だったのです。

仕方なくヘラクレスはいったん退散することにしました。

そして甥のイオラオスを従えて再挑戦にのぞみました。ヘラクレスとしても二度と同じ戦法を使えないことはよくわかっています。彼は、前回と同じようにヒドラを洞窟の外におびき出し、果敢に首を切り取りましたが、今度はイオラオスにたいまつを持たせ、切り取るたびに切り口にたいまつを火をこすりつけて焼いてしまいました。すると思ったとおり二度と首は生えてきませんでした。

こうして、ヘラクレスは八つの首を切り取りましたが、最後の首だけはどうしても切り取ることができなかったため、巨大な岩をいくつもヒドラに投げつけ、下敷きにして二度と動けないようにしてしまったということです。

さて、この戦いの最中、一匹の蟹がヒドラの陰に隠れていました。沼で生活しながらヒドラのおこぼれにあずかっていた蟹です。初めのうちはヒドラが優勢でしたから、蟹ものんき構えていましたが、ヘラクレスのたいまつ作戦をみると心配になってきました。ヒドラが死んでしまえば、何の取り柄もない蟹は心細くて生きていくことができません。

とうとう蟹は、無謀と知りつつも、いつも世話になっているヒドラに恩を返すのはこのときだとばかり、ヘラクレスの足下めがけて突進しました。そしてヘラクレスの巨大な足の指を目慢の鋏（はさみ）で力一杯挟みしました。普通の人間なら簡単にちぎれてしまうくらいの力です。

しかしヘラクレスにとっては蚊に刺されたようなものです。

「何だこいつは。邪魔だからあっちへ行け。」

簡単に放り投げられ、しまいにはその怪力でペシャンコにつぶされてしまいました。あっけない最期です。

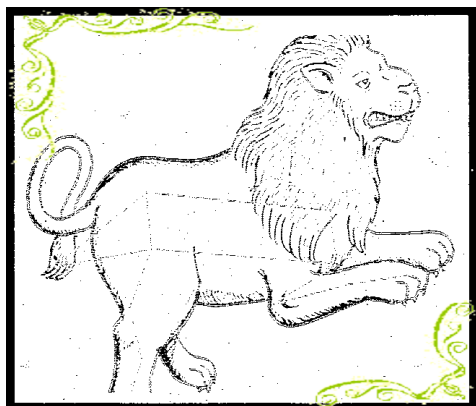
この様子を見ていた神は、蟹に同情したのでしょうか、ヒドラとともに星座として名をとどめさせてあげることにしたということです。これが、うみへび座と蟹座です。

13番地魔女の家京都アグニを応援してください



<http://kyotoagnih.com/>

獅子座★ししぎ



怪力のヘラクレスが大罪を犯し、その罪を償うために 12 の苦難と闘うことになったことはすでにお話しましたが、この獅子座の物語も、ヘラクレスがエウリステウスに命令された冒険にまつわる最初のエピソードです。

ギリシャにネメアという森がありました。しかし、人を襲うライオンが棲（す）んでいるため、誰も寄りつこうとしません。

このライオンを退治しろというのがヘラクレスになされた命令でした。

たかがライオン一匹、怪力のヘラクレスにとっては赤子の手をひねるようなものと思うかもしれませんが、このライオンはただのライオンではありません。ティフォンという怪物の子供だったのです。

そんなこととは知らないヘラクレスは、森の入り口にやってきました。村人に道案内を頼もうと思ったのですが、あたりを見回しても誰もいません。しかたなく彼は一人で森に入っていました。手には剣と弓矢を携えています。

森は思いのほか奥深く、昼だというのに夕方のような暗さです。ヘラクレスはライオンを探して何日も歩きましたが、なかなか姿を見ることさえもできません。

「では、向こうから姿を現すのを待ってみよう」

13 番地魔女の家京都アグニを応援してください



ヘラクレスは木の根もとに腰を下ろしました。

そして日も暮れ、暗い森がさらに真っ暗になったところです。風の木々をわたる音に交じって、ピシッ、パシッと枝の折れる音が聞こえてくるではありませんか。しかも少しずつ近づいてきます。

ヘラクレスは息を殺して、音の方角に目をこらしました。すると二つの光るものが揺れながらゆっくり向かってきます。

「あれはきっと目だな。とうとう見つけたぞ」

ヘラクレスはつぶやきながら身構えました。やがて闇の中から浮き上がってきた姿は、やはり大きなライオンです。しかも、旅人でも襲ってきたところなのでしょうか、口から血を滴らせています。

ヘラクレスはさっそく何本も矢を射かけて先制攻撃を開始しました。しかし敵は怪物の子供です。いとも簡単に、矢を跳ねかえしてしてしまいました。

それならと、今度は剣を抜いてライオンの頭に振り下ろします。ところが、剣はとけたアメのようにグニャリと曲がってしまいました。もう、武器はありません。

追いつめられたヘラクレスは、落ちていた太いこん棒を手にとると力一杯殴りかかりました。

バキッ！

ヘラクレスは一瞬ライオンの頭が割れたのかと思いましたが、割れたのはこん棒のほうでした。まるで戦車のようなライオンです。

いかに鋼鉄のような皮膚をしているとはいえ、ライオンのほうもいつまでもなすがままにさせておくはずありません。ついに怒り狂ってヘラクレスに飛びかかってきました。

しかし、これはヘラクレスにとっては好都合でした。彼は格闘技には自信を持っていましたから、すばやく身かわすと、ライオンの後ろに回って喉をその太い腕でグイグイ絞め付けました。さしもの怪物ライオンもこの怪力の前にはなすすべがありません。ただ狂ったようにもがくだけです。ヘラクレスはそれでも顔を真っ赤にしてライオンを絞め続けます。そして三日三晩首を絞め続け、とうとうライオンの息の根を止めてしまったのです。この知らせを受けて、村人は大喜び。これで旅人も安心して森を通ることができるようになったということです。獅子座は、この前代未聞の強さを誇ったライオンを記念して神がもうけたものです。

13 番地魔女の家京都アグニを応援してください



<http://kyotoagnih.com/>

乙女座★おとめざ



神話の世界には、乱暴なことを平気でする神がよく登場します。

神々の王ゼウスは正妻のほかにも、しょっちゅう「妻」をつくっていたことは、これまでの星座の物語でもおわかりのことと思います。

一方で地面の底の世界、冥界の王ハデスは腕づくで女性を手元に置くことに関しては、負けてはいなかったようです。

乙女座の物語は、ハデスによる少女誘拐というショッキングな事件から始まります。

野山の実りをつかさどる農業の女神デーメーテルには、ペルセフォネという年頃の美しい娘がいました。野原で花を摘むことが大好きな少女です。

その日も彼女は青空の下、一面に咲き誇る色とりどりの草花の間を、歌を口ずさみながら歩いていました。すると、これまで見たこともなかったような美しい花が一輪咲いているのが目に留まります。しかも、うっとりするような素敵な香りです。彼女は思わず花に手を伸ばしました。

その瞬間です。

花の根もとに突然小さな穴が空きました。「あら？」と思う間に穴は大きくなっていきます。そして、中からひびきの音が聞こえてきたかと思うと、馬車に引かれた戦車が現れました。

乗っているのは青白い顔をした不気味な男です。

13 番地魔女の家京都アグニを応援してください



ペルセフォネはとっさにのけぞりましたが、男の腕の伸びるのが一瞬早く、そのまま抱きかかえられてしまいました。そして、穴の中へ連れ去られてしまったのです。

穴はすぐに小さくなり、また何事もなかったように閉じてしまいました。相変わらず空は静かに晴れ渡っています。

我が子が突然行方不明になったことを知って、デーメーテルは不安と悲しみのどん底に落ちてしまいました。何しろ文字どおりの神隠しが起こってしまったのですから、誰に聞いてもどこを捜しても我が子の足どりがつかめないのです。草花や道ばたの小石にまで娘の居所を尋ねたといいます。

しかし、やっとのことで冥界の王ハデスが自分の妻にするためにペルセフォネをさらっていったことがわかりました。太陽神ヘリオスが教えてくれたのです。

「ハデス王の仕業だったのね。そういえば以前から娘を欲しがっていたようだったわ。」デーメーテルは思い出しました。

こうなるとデーメーテルの悲しみには怒りが加わります。彼女は、自分の気持ちに耐えきれず、神殿の奥深くに姿を隠してしまいました。そして誰にも会おうともせず口を利こうともしません。

地上では大変なことになりました。野山の実りをつかさどる女神が姿を隠してしまったのです。草花はいっせいにしぼみ、作物は次々と枯れはじめ、木々も実をつげなくなってしまいました。あわてたのが神々の王ゼウスです。さっそくハデスへの説得に乗り出します。

ゼウスに説得されれば、さしもの冥界の王も了承せずにはられません。しぶしぶペルセフォネを地上に戻すことになりました。

ところが、転んでもただでは起きないのが冥界の王です。おみやげだといって、ザクロを一房ペルセフォネに差し出します。

「短い間だったがお前と私の記念だ。持って行きなさい。そして道々食べるといい」
「なんて優しいハデスさま」

まだ若いペルセフォネは感激しますが、実はこれには恐ろしい仕掛けがあるのです。

13 番地魔女の家京都アグニを応援してください



<http://kyotoagnih.com/>



しかしともかく、ペルセフォネがデーメーテルと涙の対面をし、ともに抱き合って一段落。再び野山は緑にあふれ、実り豊かな大地が帰ってきました。

ところが、娘の持っているザクロを見つけて、デーメーテルはサッと青ざめます。

「まさかお前、これを食べはしなかっただろうね」

「いえ、何粒かは食べました」

この言葉を聞いて、デーメーテルはそのまま絶句してしまいました。

ハデスの差し出したザクロの実を食べた者は一粒につき一カ月間、ハデスのもとで暮らさなければならない掟になっていたのです。

「本当ですか、お母さま」

「この掟はゼウス様の力をもってしても破れないものなのよ。ああ、なんてハデスはひどいことを」

デーメーテルはそのまま泣き崩れてしまいました。

こうして一年のうち数カ月は、ペルセフォネはハデスのもとで暮らさなければならなくなりました。毎年その数カ月、デーメーテルは悲しみにくれ、神殿に姿を隠してしまうのです。

そしてその間、野山も枯れ、地上に冬が訪れるようになったということです。

乙女座は、背に翼をつけ、手に麦の穂を持った女性として描かれますが、これはペルセフォネではなく、我が子を案じて悲しむ実りの女神デーメーテルの姿だとされています。

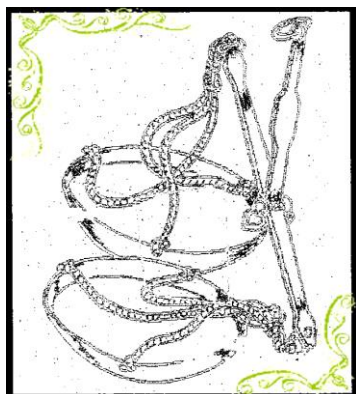
13 番地魔女の家京都アグニを応援してください



<http://kyotoagnih.com/>



天秤座★てんびんざ



最近はなかなか見られなくなりましたが、昔は物の目方をはかるときには天秤がよく用いられていました。ご存じのように、片方には品物を、もう片方には分銅などを置いて重さをはかったのです。

ところで、神話の世界の天秤は何をはかったのでしょうか。

実は、人の魂を秤（はかり）にかけ、その善悪をはかったのだそうです。天秤の持ち主は、正義をつかさどる女神アストライアでした。

もめ事があると、アストライアは間に入り、両者の魂を天秤にかけました。すると悪いほうは一瞬のうちに下がり、良いほうは持ち上がります。これで簡単にどちらが悪かったのかわかってしまいました。いくら弁舌が通っていても、あるいは逆に口べたであっても関係ありません。

「正義は必ず勝つ」というわけです。

ところで、神話によれば、この世は金・銀・銅などのいくつかの時代に分けられるのだそうです。

最初は黄金時代。神々も人間たちも地上で仲良<暮らしていた平和な時代です。争いごとほとんど起こらず、たまにいざこざがあっても、アストライアがすぐに解決してしまいます。

この時代にはアストライアの天秤もほとんど使われることはありませんでした。

続いて銀の時代が来ます。この時代になると人間は次第に争いを始めるようになりました。強い者と弱い者が生まれ、虐げられるような人も出てきます。それを見て人間に愛想をつかし、天上の国に帰ってしまう神が続出するようになりました。人間は神に見放された、というわけなのでしょう。

しかしアストライアだけは違います。辛抱強く人間を見守り、正義を助けながら、何とか世の中を平和にしよ

13 番地魔女の家京都アグニを応援してください



<http://kyotoagnih.com/>



うと努力していたのです。それにもかかわらず、人間はどんどん悪くなっていきました。

それまで、争いはあっても決して殺しあうことがなかった人間が、互いに憎み合い、親子兄弟でさえも殺し合うようになってしまいました。これが銅の時代です。

ただ、銅の時代の次には、神と人間の間に生まれた英雄たちが活躍した時代がありましたから、その頃はアストライアも少しはホッとしたことでしょう。

ところが英雄たちも去り、次の鉄の時代に入ると、人間はまたまた殺し合いを始めるようになりました。しかも今度は集団での殺し合い、つまり戦争を始めるようになったのです。こうなると、いくらアストライアとはいえ手に負えなくなります。何しろ毎年毎年殺し合いがあちこちで同時に大量に起こるのですから、天秤ひとつでとても善悪をはかっている余裕などありません。

ここまで人間は墮落してしまったのです。

悲しい気持ちのまま、とうとうアストライアは天高く神の国へ帰ってしまいました。そしてそのまま星座になったといいます。

そして、アストライアの手放した天秤は持ち主とは別れ、天秤座に姿を変えて、まるで私たちの墮落をとがめるように地上を見おろしているのです。

13 番地魔女の家京都アグニを応援してください



<http://kyotoagnih.com/>

蠍座★さそりざ



蠍といえば、言わずと知れた猛毒を持った動物です。

尻尾の先にある毒針を持ち上げて敵を威嚇します。その恐ろしい蠍を使って殺人を犯すなどといえば、ミステリー小説の世界にありがちな話かもしれません。そして蠍座にまつわる物語も、実は蠍殺人事件そのものなのです。

海の神ポセイドンにはオリオンという息子がいました。どうも酒癖があまりよくなく、かなりの乱暴者だったのですが、体も大きく力も強く、顔立ちも良かったためか結構人気があったといえます。実際に、何人かの女神や王女たちと浮き名を流すという神話も残されているくらいです。

しかし、何よりも彼が天下に名をとどろかせていたのは、狩猟の腕によってでした。

日頃からオリオン自身も狩猟に対しては自慢に思っていたようで、仲間と酒を飲みながら、ついこんなことを豪語してしまいました。

「俺の狩猟の腕は天下一だ。どんな獲物だって一発でしとめてしまう。どんなに足の速い鹿だって、どんなに獐猛（どうもう）な熊だって、軽いモンよ。俺様にかかっちゃ敵じゃないぜ。」

もちろん、オリオンはかなり酔っぱらっていたのです。しかも、仲間からおだてられて、ついいい気持ちになってしまったのです。

しかし、このくらいならば、まだ“酔っぱらいの自慢話”くらいに聞き流すこともできたかもしれませんが、オリオンはさらに調子に乗ります。

13 番地魔女の家京都アグニを応援してください



「世界中の獣という獣を俺様が根こそぎ狩り取ってみせる」

ところが、これが大地の女神ガイアの耳に入ったから、大変です。

「いったい、だれのお陰で毎日獲物たちが手に入っているのだ。私が大地をつかさどっているからではないか」

ガイアは烈火のごとく怒りました。思い上がるのもいい加減にしろ、というわけです。

しかし、まさかこの程度の失言でオリオンも殺されるとは思わなかったでしょう。恐ろしい女神がいたものですが、ガイアも、これまでも再三オリオンの乱暴に腹を立てていたため、この暴言を耳にするや、とうとう堪忍袋の緒が切れてしまったのです。

「オリオンを刺し殺しておしまい」

ガイアに命じられたのは猛毒を持つ蠍でした。

蠍は、ガイアの放った文字どおりの刺客として、オリオンの背後から忍び寄るとその毒針を突き刺しました。こうしてオリオンは自らの思い上がりのために、あえない最期を遂げることになったのです。

この手柄により、蠍は星座に加えられることになりました。一方オリオンも乱暴者とはいえ、さすがにポセイドンの息子ですから、星座に加えられオリオン座となっています。

しかし、よほど蠍が怖いのでしょうか、現在でも天空を逃げ回るかのように、蠍座が南東の空に昇る頃には、オリオン座は正反対の西の地平に沈んでゆくのです。

13番地魔女の家京都アグニを応援してください



<http://kyotoagnih.com/>

射手座★いてざ



安楽死の問題は、医学界ばかりでなく私たち一人ひとりに直接関わる問題として、社会的にも盛んに論議されていますが、神話の世界にも、苦しんでいる人を目の前にして安楽死させてあげたいと願う、悲痛なエピソードが出てきます。それが射手座の物語です。

上半身が人間で下半身が馬の姿をしたケンタウルス族は、どちらかといえば野蛮な種族でした。ところがその中であって、ケイロンだけは少し違っていました。弓術にも優れているうえ学芸にも秀でていました。

つまり文武両道というわけです。何しろ、音楽・医術・予言などをつかさどる太陽の神アポロンと狩猟の女神でもある月の女神アルテミスに教えを受けたといえますから、その実力は筋金入りです。

やがて、そのケイロン自身も師となり、洞窟で英雄たちを教育するようになります。その生徒のひとりに、あのヘラクレスがいました。

ところが、このヘラクレスがケンタウルスたちを相手に大喧嘩を始めてしまったのです。その頃は、すでにケイロンも引退し、別の土地に移り住んで静かに暮らしていました。そこへ何人かのケンタウルスたちが、息せききってなだれ込んできます。

「いったい何事です」

ケイロンはびっくりして叫びます。

「同族のよしみで、ちょっとかくまってくれないか。実はヘラクレスに追われているのだ」

13番地魔女の家京都アグニを応援してください



おもてを見ると、なるほど大男がこちらに向かって突進してきます。

話を聞くと、酒の席でのつまらないいざこざから、ヘラクレスが突然ケンタウルスたちに矢を射かけてきたというのです。もともと怪力のある大男のうえに酒が入っていますから、手加減ということをしません。野蛮といわれるケンタウルスたちも、ただ逃げまどうばかりだったのです。

そうこうするうちに、真っ赤な顔をしたヘラクレスは、ケンタウルスたちが逃げ込んだケイロンの家めがけて矢を放ちはじめました。

ところが、そのうちの一本が運悪くケイロンの胸に命中してしまったのです。

そこへ雄叫びをあげてヘラクレスが乱入します。

そのとたん、彼は目の前の光景に呆然としました。そして赤かった顔をずんずん青ざめさせました。ここへ来て、ヘラクレスは事の重大さに我に返ります。

「先生！ケイロン先生！」

ヘラクレスは恩師の体を抱き起こして何度も叫びますが、ケイロンはもがき苦しむばかりです。

ヘラクレスの矢じりには、こともあろうに、あの怪物ヒドラの毒が塗ってあったのです。ふつうなら即死してもおかしくありません。

ところが、ケイロンはもがき苦しむものの死ぬことはありませんでした。神々の王ゼウスの父親であるクロノスと妖精フィラの間に生まれた子のため、不死身だったのです。

しかし、ヒドラの猛毒は消えることはありません。ですから、猛毒による苦痛も消え去ることはありません。ケイロンは、死ぬほどの苦しみが永久に続くなかで死ぬことができないのです。

「なんということをしてしまったのだ」

ヘラクレスは滝のような涙を流しながら、自らの罪を悔います。そして必死に神に祈りました。

13番地魔女の家京都アグニを応援してください



<http://kyotoagnih.com/>



「この猛毒が永久に消えないのなら、せめて先生に安らかに死なせてあげてください」

自分が犯した罪のためなのに、死なせてあげてくださいというのもひどい話ですが、ヘラクレスにとっては、ほかにどうすることもできなかったのです。

ゼウスも見かねて、この必死の願いを受け入れました。そして、ケイロンにその場で安らかな死を与えたということです。

その後ゼウスは、弓の名手ケイロンの死を惜しんで、彼を射手座として星座に加えました。射手座は、今では蠍座の尻尾を狙った位置で矢をつがえています。

山羊座★やぎざ



山羊座の物語はく牧神パンの物語です。

パンは上半身が人間で、顔と下半身が山羊の姿をしていました。頭には角も生えていたということです。髭面の年寄りくさい顔つきで、母親の妖精ドリオペも乳を飲ませるのを忘れて逃げ出してしまったくらいでした。しかし、父親でもある伝令の神ヘルメスは彼をたいそうかわいがったということです。

パンは悪戯好きでしたが、羊飼いの守り神として野山を駆けめぐっては葦笛（あしぶえ）を奏でる、陽気な牧神でした。

このパンの葦笛には、こんなエピソードも残されています。

あるとき、パンは妖精シュリンクスに恋をしてしまいます。しかし、パンはあのと通りの顔。なんだか気味が悪かったのでしょうか、シュリンクスは徹底的に逃げ回りました。

そして、その日もパンは野原で彼女を見つけ、追いかけて回しながら、ついに川岸に追いつめてしまいました。

13 番地魔女の家京都アグニを応援してください



<http://kyotoagnih.com/>



するとシュリンクスは神に助けを求めるのです。よほどパンも嫌われたものです。

とたんに、神の助けなのか、彼女は跡形もなく消え去ってしまいました。あとには葦の束が落ちているだけです。

しかたなく、パンはこの葦から笛を作り、消えてしまった恋人をしのびながらその笛を吹いたというのです。

また、パンにはこんな話もあります。

歌の上手な森の妖精エコーにパンは恋をします。しかし、例によってひじ鉄砲をくらのますが、そのあまりのすげなさに腹を立てたパンは、近くにいた羊飼いを妖術で操ってエコーをバラバラにすると、山にばらまいてしまったのです。それ以来、山で誰かが声をあげるとエコーが真似をするようになったのだといいます。

さらに悪戯好きのパンは、ときどき人々の不安をあおって混乱させ、それを見て楽しんだともいわれています。これがパニックという言葉の語源になったそうです。

さて、そのパニックが彼自身のうえに起こったことがありました。それが山羊座の物語になります。

あるとき、ナイル川のほとりで神々が一堂に集まり、大宴会を催しました。もちろん葦笛を自在に操るパンは宴会には欠かせません。神々は笛に合わせて歌ったり踊ったり大いに盛り上がっていました。

そして、宴会もたけなわになったときです。頭の奥まで揺すぶられるような大きなうなり声とともに、巨大な怪物が宴会場に乱入してきました。

この怪物こそ、その後地底に閉じこめられ、暴れるたびに地震を起こしたともいわれているティフォンです。百の頭を持ち、百のうなり声を出し、焼けた岩や火を吐く怪物です。身の丈も頭が天につかえるくらい巨大で、翼を広げると世界の果てまで届くといわれるくらいの、とんでもない化け物でした。伝染病の「チフス」や東洋の「台風」とも語源を同じくするという説があるくらいですから、神々さえも恐れていたのでしょう。

実はゼウスたちに迫害されて、その一族を快く思っていなかった大地の女神ガイアが、嫌がらせのために差し向けたのでした。

宴会場はそれこそ大混乱です。神々は我先にと散り散りになって退散してしまいました。もちろん、牧神パンも頭の中はパニックです。さっそく全身を山羊に変身させて一目散に逃げ出しました。

しかし、あまりあわてていたため方向がわからず、気が付いたときには目の前はナイル川でした。そうかとい

13 番地魔女の家京都アグニを応援してください



<http://kyotoagnih.com/>



って引き返すわけにもいきません。

仕方なく飛び込んだのはいいのですが、山羊の姿ではうまく泳げません。

ここが一番、魚に変身しようと気を取り直しますが、やはり頭の中が依然パニックだったのでしょう。変身はうまくいかず、下半身は魚、上半身は山羊という珍妙な姿になってしまいました。

それでも本人は魚になったつもりで一生懸命泳いで逃げたということです。

早々とオリンポスの山に避難していた神々は、大喝采しながらこのあまりにおかしな格好を眺めていました。いまなら、さしずめ写真の一枚や二枚は誰かが撮っていたところでしょう。

「あの姿を記念にして残しておかない手はない」

神々は口々に言いました。

そこで、神々はその姿を山羊座として星座にとどめ、いつまでも記念とすることにしたということです。

水瓶座★みずかめざ



神代の昔から、美しいものは権力のある者によって独占されてしまうものなのかもしれません。

例えば、神々はオリンポスの神殿で晚餐（ばんさん）をとりましたが、そのときの給仕役は、絶世の美女で青春の女神でもあったヘーベが務めていました。きっと我がままな神々は、杯に神酒ネクテルを輝くばかりの美しい手で注いでもらいながら、上機嫌で食事をしていたことでしょう。

ところがヘーベもやはり神とはいえ女性です。結婚して家を出ることになりました。お相手は、またしても登

13 番地魔女の家京都アグニを応援してください



<http://kyotoagnih.com/>



場しますが、あのヘラクレスです。

さて、こうなると神々はヘーベの代役を求めることになります。しかも、ヘーベにも劣らないくらい的美しさを求めます。一度美しい給仕を従えて食事をしてしまったら、その喜びが忘れられなくなってしまうのかもしれない。

しかし、そんなに美しい女性がほかにいるのでしょうか。神々の王ゼウスも頭を悩ませていました。

そんなある日、下界の様子を何気なく眺めていたゼウスの目に、羊を追うひとつのとびきり美しい姿が飛び込んできます。

「なんと、ヘーベにも勝るとも劣らない姿だ」

ゼウスは感嘆して独り言をもらしますが、ゼウスの見初めた美しい姿は、実は女性ではありませんでした。彼こそ、水瓶座の物語の主人公になるトロイの王子ガニメデスだったのです。

もっとも、ゼウスにとっては、美しければ女性でも男性でも構いませんでした。さっそく自ら驚に姿を変え、一気に下界へ舞い降ります。そして、ガニメデスの襟首をひつつかむと、神殿に連れて帰りました。

「いや、済まなかった。私は大神のゼウスだ。怖がらないでほしい」

ゼウスは、牛に化けてエウロペをさらったときと同じ文句で切り出しました。

「おまえを一目見たときから気に入ってしまったのだ。どうかこの神殿で神々の杯にネクテルを注ぐ役を務めてはくれないか」

「そんなこと、急におっしゃられても」

「もちろんだ。よくわかる。そのかわり、お前には永遠の若さと美貌を与えよう」

なだめるようにゼウスは話しかけますが、さすがに神々の王です。その言葉には逆らえない威圧感がありました。

しかし実は、ガニメデスもこれは悪くない話だと思っていました。神々に仕えられるなんて、光栄なことではないかという気さえしたのです。

13 番地魔女の家京都アグニを応援してください



<http://kyotoagnih.com/>

ただ、彼にもひとつだけ心配がありました。

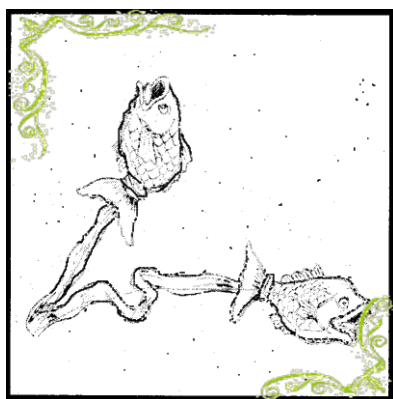
「私がいなくなれば、両親がどんなに寂しがることでしょう。」

それを聞いて、ゼウスは大きくうなずきます。そして、すぐさま伝令の神ヘルメスをトロイの宮殿に派遣しました。

ことの次第を聞いて、トロイ国王夫妻はびっくり仰天です。しかし神の意向です。やむなく了承しました。

ゼウスは感謝して、たくさんの宝物をトロイ国王に与えたということです。そして、両親の悲しみを少しでも和らげるために、せめて空を見上げればいつでも息子の姿が見られるようにと考えたのでしょう、水瓶を抱えて給仕にまわっているガニメデスの姿を水瓶座として、夜空に打ち上げたのです。

魚座★うおざ



ヴィーナスといえば美の女神としてよく知られていますが、ギリシャ神話ではアフロディテと呼ばれています。彼女は、ゼウスの子供ともいわれていますが、普通はゼウスの父クロノスが天下を取るために自分の父親ウラノスを殺し、その生殖器を海に投げ込んだときに精液と海水が混ざってできた泡から生まれたとされています。この神話をモチーフにしたのがルネサンス時代の画家ボッティチェリの描いた、有名な「ヴィーナスの誕生」です。

このアフロディテにはエロスという息子がいました。こちらは愛の神です。ローマではクピードと呼ばれています。つまり英語でいうところのキューピッドです。ですから、美は女性、愛は男性の神となります。

さて、魚座は二匹の魚がリボンでつながれた姿をしています。実はこの二匹はアフロディテとエロスなので

13番地魔女の家京都アグニを応援してください



す。

ナイル川のほとりで神々が大宴会を催した話は、すでに山羊座の物語に登場しましたが、この母子も神様ですから、当然その宴会に出席していました。そして、宴も最高潮になったとき、突如として怪物ティフォンが宴会場に現れます。神々は散り散りになって逃げますが、このときアフロディテとエロスは魚に変身して逃げたのです。

ちなみに、ゼウスは鳥になり、その妻ヘーラは雌牛に、太陽の神アポロンはカラス、月の女神アルテミスは猫になって逃げたとされています。

アフロディテとエロスは手をつないで一緒に逃げましたが、ナイル川に飛び込み、魚に変身すると、当然手をつなぐことができません。そこでお互いはぐれないようにリボンで体を結びあったのです。

そして、美と愛の神はともに別れ別れになることなく、いまでも一緒にいることができました。

ゼウスはこの母子の姿をいつまでも記念するために、魚座として星座に加えたということです。ところで、宴会場で暴れまくったティフォンは、その後どうなったのでしょうか。

実は、そのとき神々も全員が逃げ出してしまったのではなかったのです。ただひとり、学芸と勝利の女神アテナだけは、勇敢にもティフォンに挑もうとしていたのです。

ゼウスはそれを見てびっくりしました。何しろ彼女は自分の娘なのですから。そこでゼウスは思い直して怪物の前にとって返します。こうなればさすがに神々の王です、持てる力を総動員してティフォンに一步も譲りません。両者のぶつかりあいで、あたりは一面火の海になったといえます。

そして、ゼウスの稲妻を投げつける攻撃が効いたのでしょうか、しだいにティフォンは力を弱めはじめ、ついにこの大怪物はシチリア島に追いつめられてしまいます。

そこで、ゼウスは「とどめだ」とばかりに、巨大な山をフラフラになったティフォンの上に投げつけました。これでさしものティフォンも万事休す、地下に閉じこめられてしまったのです。この山が現在シチリア島にそびえるエトナ火山だということです。そして、エトナ山が噴火するのは、ティフォンが地下で暴れるからなのだそうです。

13 番地魔女の家京都アグニを応援してください



<http://kyotoagnih.com/>